

チーム
Tme
27号

特集

総合周産期
母子医療センター



Topics & News
帝京大学医学部附属病院からのお知らせ

19

チーム医療

薬剤師 金子美佳さん
栄養部課長 芦川美希さん

17

悪性腫瘍の妊孕性温存治療

長阪一憲先生

出生前診断とは

木戸浩一郎先生

8

M・F・I・C・U・N・I・C・U・G・C・Uを
ご案内します

伊藤直樹先生
近内智美さん
猪越遥佳さん
原口愛美さん
中條麻実さん

4

特集

総合周産期母子医療センター

3

安心安全なお産をフォロー

総合周産期母子医療センター 長笹森幸文先生

目次

◎発行年月
2022年2月
◎発行
帝京大学医学部附属病院 総務課広報企画係
◎編集・制作
ビーデザイン

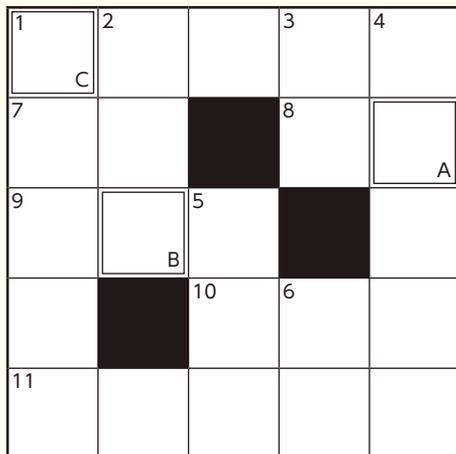
T-me

T-me「チーム」は、
帝京大学医学部附属病院と
地域の皆さまをつなぐ院内誌です。
T:Teikyo = 帝京大学医学部附属病院の頭文字
me:Medical = 地域の皆さまのための医療
また、「チーム」には
医師、看護師、薬剤師、栄養士、
その他病院全てのスタッフが連携して行う
チーム医療の意味も込められています。

printed in japan
本紙掲載の写真・記事の無断転用を禁じます。
©2022 帝京大学医学部附属病院

クロスワードパズル

二重ワクの中に入る文字をアルファベット順につなげると、妊娠出産に関するある単語になります。

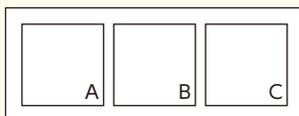


(タテのカギ)

- 1 作品の序章。エピローグの反対。
- 2 女の子の髪やプレゼントに結ばれます。
- 3 夏になると鳴きはじめる虫。
- 4 英語で「忍び寄り人」。運動の時などに履きます。
- 5 太陽から6番目の、輪っかのある星。
- 6 「導くもの」の意。車についているものはカー○○。

(ヨコのカギ)

- 1 王女様。ディズニーアニメでは主役になります。
- 7 自動でお部屋を掃除してくれる、お掃除○○。
- 8 小さいものごと。
- 9 輪舞曲のこと。
- 10 お腹の反対側。
- 11 肉汁のこと。これでステーキソースを作ります。



(答えは P.19)

特集

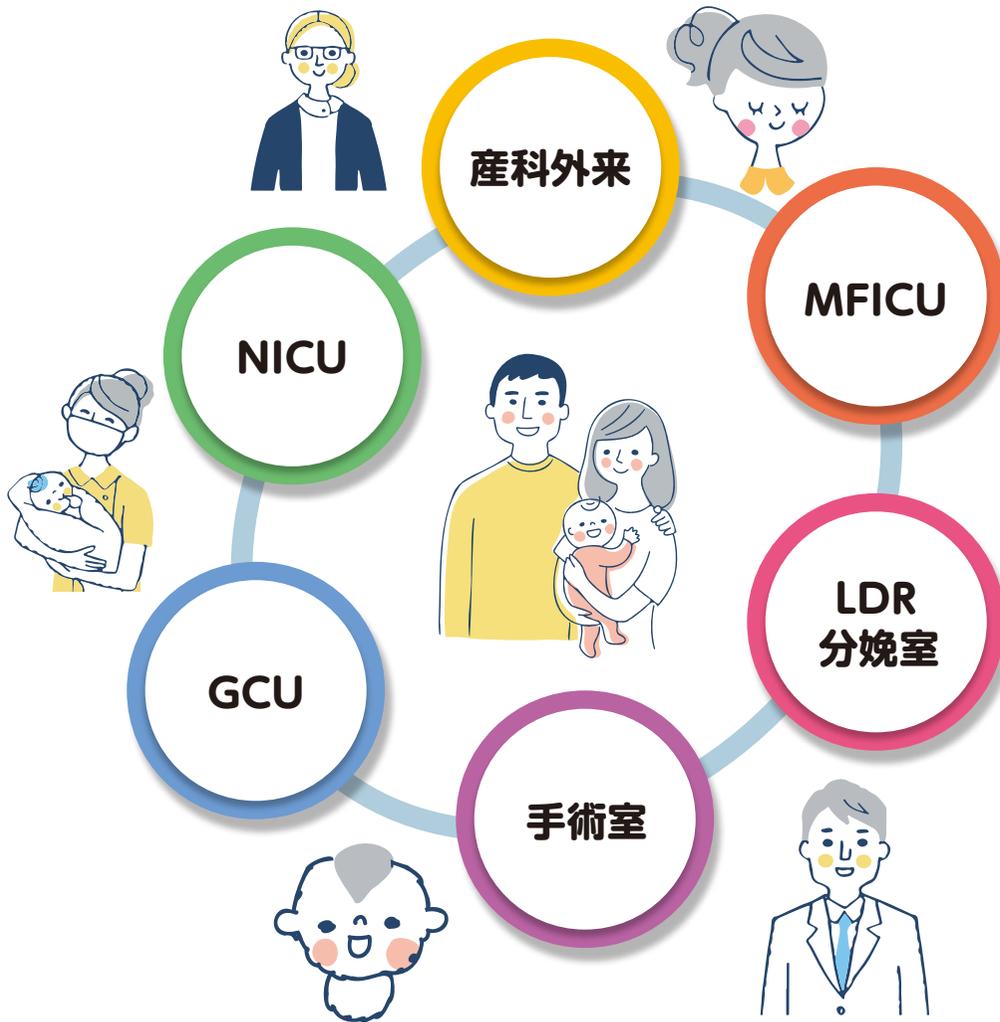
総合周産期母子医療センター

産期領域での救急・重症管理、
治療に対応できる施設として、
平成10年4月に都から認可された
「総合周産期母子医療センター」。
お母さんと赤ちゃん、ともに
安心・安全にすごせるような
体制が整っています。



New born baby

安心安全なお産をフォロー



女性にとっても、ご家族にとっても最大のイベント、妊娠と出産。帝京大学医学部附属病院の産科では総合周産期母子医療センターとしてハイリスク妊娠にも24時間に対応しており、快適で安全なお産をご提供できる体制を整備しています。

「総合周産期母子医療センター」は

救急・重症管理、治療に対応できる施設として、24時間態勢で臨んでいます。

1998年4月に東京都から認可された総合周産期母子医療センターは、妊娠から出産、新生児治療までトータルで診ています。

センター長の笹森幸文先生にお話をうかがいました。

「妊娠や分娩は全てが正常に進むわけではなく、中には妊娠中に異常がでたり、分娩中や産後にも異常が出ることもあります。

出産においては250件に1件の頻度で妊産婦死亡の危険を伴うとされていますが、出産年齢の高齢化などによりハイリスクの妊娠・出産は増加傾向にあります。

かつては羊水塞栓や産後の出血、常位胎盤早期剥離、妊娠高血圧症候群など、重症の疾患で亡くなるお母さんが多くいました。また新生児も、呼吸障害や感染症などでの死亡が珍しいものではありませんでした。

妊婦やお母さんの疾患には産婦人科や産科、新生児に対しては新生児科と、それぞれが独立して治療に当たっていたのですが、妊娠・出産・

新生児と、周産期に係る高度な医療をよりスムーズにおこなうため、センターが設立されました」

安全なお産のため、産科と新生児科、手術室を近くに配置

「アメリカには以前から母子をトータルで診るシステムがあったので、それをお手本にしている。いくつかの病院が周産期母子医療センターを設立しました。

同じフロアに産科と新生児科、MFIICU（母体胎児集中治療室）と、NICU（新生児集中治療室）が揃っており、さらに手術室も近くに配置しているので、何かあると迅速に治療や手術に移れるというものです。

周産期母子医療センターを標榜している医療機関は徐々に増え、東京都ではかなりの数があります（次ページのマップ参照）。

また、MFIICUを有していない『地域周産



笹森幸文先生
総合周産期母子医療センター長
産婦人科 病院教授

1987年 帝京大学医学部卒業
2009年 帝京大学医学部産婦人科・医学教育センター講師
2014年 帝京大学医学部 Best Teacher Award受賞
2021年 帝京大学医学部産婦人科 病院教授
・総合周産期母子医療センター長

期センター』や『周産期連携施設』もあり都内をカバーしていますので、母子を守るシステムは完成に近づいていると思います。

当センターが管轄する区東北部ブロック（荒川区、足立区、葛飾区）を中心に、近隣の板橋区、北区、練馬区、豊島区から、またさいたま市、川口市、戸田市など、埼玉県のある患者さんまで広く母体搬送や新生児搬送を受け入れています」

——治療の方針や設備で、強みと感ずる部分はありますか？

「病院の建て替えの時に、総合周産期母子医療センターと同じフロアにまとめ、手術室をすぐ下のフロアに配置しました。急ぎの帝王切開の時は、すぐに専用のエレベーターで降りてオペ室に移動することができます。

こういった物理的な距離の近さに加え、NICUと産科は心理的な距離も近く、連携が取れていると思います。産科の助産師がNICUのナースとして働いていたり、その逆もあるので、垣根はありません」

——強みを保つために、心掛けていることはありますか？

「週に一回の周産期カンファレンスには、薬剤師やその他の職種も参加して情報を共有していま

す。我々からは、こういう疾患をお持ちの妊産婦さんや胎児がいますという情報提供をして、NICUには受け入れ体制を整えてもらいます。

またNICUに新生児を送った後は、その後の経過と現状をフィードバックしてもらうようにしています」

帝京大学医学部附属病院だけでなく 近隣の医療者全てが一丸となって

「垣根なくお母さんとお子さんを守るという目標は、全ての医療者が共通して持っている想いです。

院内だけではなく、東京都全体で見ても、例えば板橋区には大学病院が2つありますが、その病院と当院はライバル関係にあるわけではありません。一緒に近隣の地区を守るう、東京都全体で母子医療を守るうという意識で働いています。

院内でも、全てのスタッフが、医療行為を適切におこなっていることはもちろん、妊産婦さんや赤ちゃんに寄り添ったケアをしているところは自慢できる部分です」



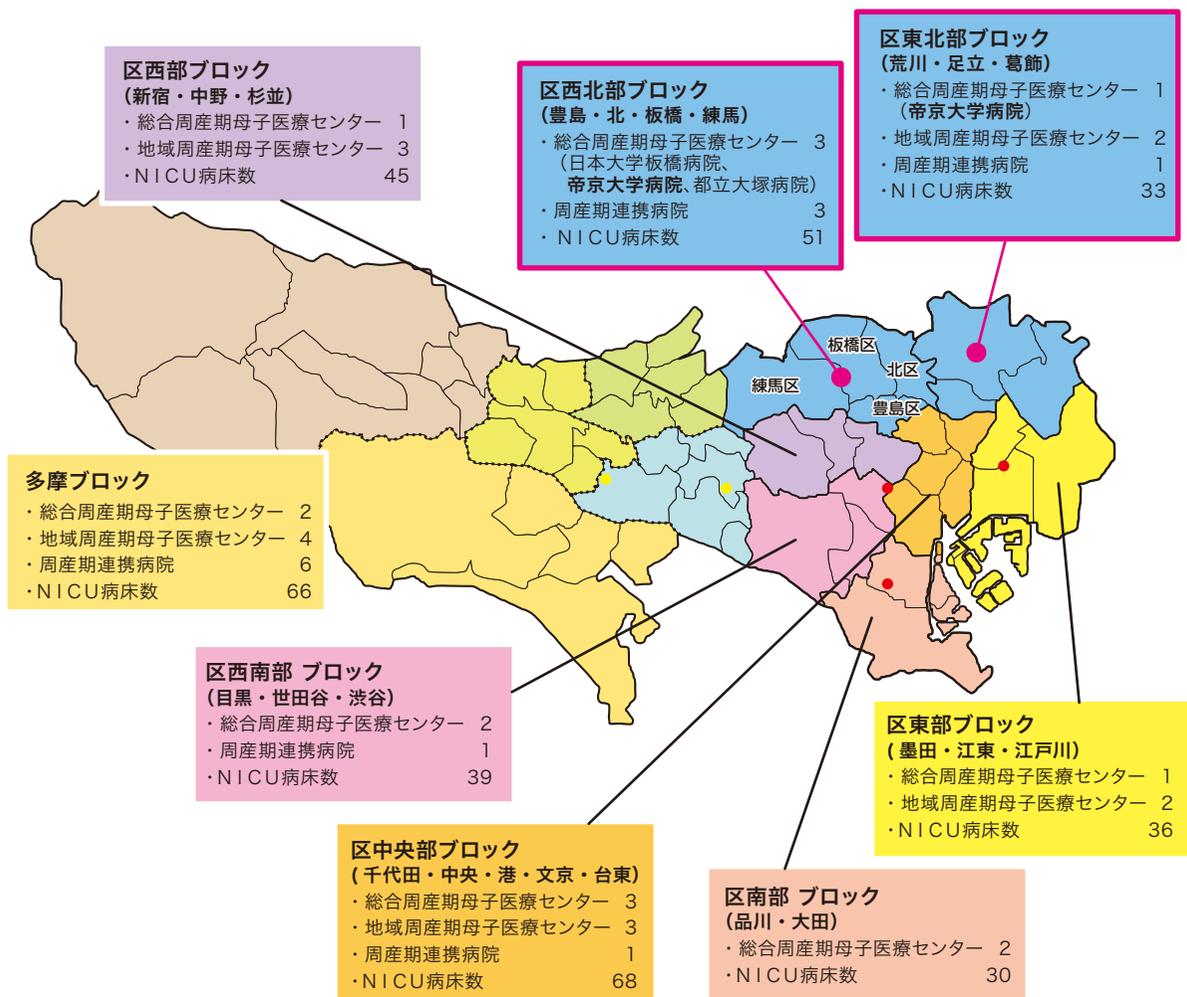
NICU病棟

安心な妊娠出産を叶える さまざまなプロフェッショナルのサポート

「私がよく、医学部の学生に言うことがあります。他の科は病気を治療することに心血を注いでいますが、特別な医療介入なく正常に産する方も多い産科は、病院の中では特殊な科だということです。

東京都

周産期母子医療センター及び周産期連携病院の配置図 (2021年 7月1日現在)



今は新型コロナウイルス感染症の影響で両親学級や母親学級が開催できていませんが、そこでは『さまざまな職種のスタッフが、妊娠出産を正常に経過させるためにどのようにサポートしているのか』ということもお伝えしています。

女性の生涯の中で、最も死に近づく時は、自分が生まれる時と出産する時だといわれています。ご本人やご主人に、お産ってこんなに素晴らしいということと同時に、危険も孕んでいるんだということを知っていただけたらと思います」

―― 妊産婦さんやその周りの方、これから妊娠を考えている方にメッセージをお願いします。

「妊娠出産は、女性の人生の中で最大のイベントで、そこから人生が一変するほどのものです。生活が劇的に変わる分岐点である妊娠・出産に対して、ご自分が病気になるったり、出産の際に緊急帝王切開を選択しないといけなくなったり、赤ちゃんが病気になるったりした時に、気が動転したりパニックになってしまったりするかもしれません。

そこをいえるんなチームで最大限サポートする、助けるシステムがあるのが、総合周産期母子医療センターです。安心して、妊娠出産を迎えてくださいとお伝えしたいです」

総合周産期母子医療センターには、大事な3つのお部屋があります

妊娠から出産、新生児までトータルで見守る総合周産期母子医療センター。センターを構成するための大きな柱となっているお部屋を紹介します。



妊婦さんと胎児を見守る

M F I C U

M F I C Uとは、M II母体、F II胎児を意味する英単語の頭文字からなるもので、「母体・胎児集中治療室」のことです。妊娠から出産までに何らかのリスクを持った妊産婦が入院しています。

主な対象疾患は、切迫早産、前期破水、妊娠高血圧症候群、胎児発育不全、多胎妊娠、前置胎盤、常位胎盤早期剥離、羊水過多・過少、妊娠糖尿病、母体合併症妊娠、胎児小児外科疾患、産褥出血などです。



「M F I C Uは、いかにも集中治療室のような作りではなく、リラックスできる半個室の空間でなっています。状態が安定してきたら一般病棟のベッドに移ることもあります」

—— M F I C Uにおけるチーム医療について教えてください。

「元々持病のある妊婦さんも多く、膠原病や甲状腺疾患などの方にはそれぞれ専門の科に協力していただいています。」

妊娠中に発生する妊娠合併症は主に内科、重症な場合は救急科や麻酔科に願うこともあります。

妊娠合併症には、母体に影響を及ぼすもの、胎児に影響を及ぼすもの、または母子ともに影響を及ぼすものがあり、問題が起こる時期もさまざまです。例えば、妊娠中に血糖値のコントロールが上手くできなくなってしまう『妊娠糖尿病』、胎盤の位置に異常がある『前置胎盤』や胎盤が早い時期に子宮から剥がれる『常位胎盤早期剥離』などがあり、胎児の死亡や出血過多のリスクが生じます。

分娩後に大量出血を起こした場合には迅速に『子宮動脈塞栓術』をおこないます。

放射線科のI V RチームによってX線などの

画像診断装置で体内の様子を見ながらカテーテルや針を使って手術するもので、他の医療機関から患者さんが送られてくることもあります。

糖尿病だと管理栄養士、持病で投薬されている方には薬剤師など、さまざまなスペシャリストのサポートがひとりの患者さんに届くようになっていきます。

リスクをお持ちの母子に対し、かつては産科のみで診ていた時代がありました。今は各科が連携して治療に当たっています」

——患者さんへの対応で、心がけていることを教えてください。

「何らかの異常で妊娠出産がスムーズに進まなくなった時に、『今、自分はどんな状況なのか』ということが一番知りたいところだと思うので、産科の医師に加え、助産師からも説明いたします。」

妊産婦さんの状況は、個人個人によってさまざまです。病気はもちろんです、上のお子さんがいらっしゃるのかどうか、その子の預け先などの家庭背景なども関係してきます。

基本的な治療方針はありますが、細かいところは個々の患者さんに合わせて対応できるようにと考えています」

24時間体制で新生児を治療

NICU

NICUとは、「新生児集中治療室」のことです。

主に早産児、低出生体重児、呼吸障害、新生児仮死など、胎児の時点で外科的な治療が必要になると診断のついた新生児や、脳神経外科の領域の合併症があったり心臓の病気の新生児などを、生まれてすぐに24時間体制で治療する場所です。



総合周産期母子医療センターには、12床のNICU、24床のGCUがあります。伊藤直樹先生にお話を伺いました。

——チーム医療としては、どのような協力体制を敷いていますか？

「院外に関しては、東京都母体救命搬送システムという仕組みがあります。緊急に母体救命処置が必要な妊産婦さんについて、救急医療と周産期医療が連携して迅速に受入先を確保するもので、病棟の空きなどの問い合わせが産科とNICUに来るものです。

これは東京都が管轄するシステムで、異常のある妊婦さんや新生児の行き場がなくならないような体制づくりをしています。

次に院内の体制ですが、総合周産期母子医療センターにはさまざまな職種スタッフがあり、それぞれ密に連携を取っています。一週間に一回おこなっているカンファレンスで、『このような状態の胎児がいる』などの情報を共有します。

胎児の超音波検査に同席し、妊婦さんから直接お話を伺ったりすることもあります。NICUを出てから小児科に行く赤ちゃんも多いので、産科だけではなく外科や小児科とも連



伊藤直樹先生 小児科講師

1995年金沢大学医学部卒業。国立成育医療研究センター新生児科、東大病院小児科NICUを経て、2015年から帝京大学病院NICU室長。専門は新生児全般、妊娠および授乳と薬

携を密にしています。また中央検査部やリハビリテーション部、栄養部など、本当に多くの部署の協力を得ています」

——新型コロナウイルス感染症の影響はありますか。

「今、感染予防のため、お母さんと赤ちゃんの面会が頻繁には叶いません。赤ちゃんが家族と触れ合うことは、将来の社会性や自立心の礎となる愛着形成に関わります。

お母さんとお父さん、それにおじいちゃんとおばあちゃんも含めた、子供を中心にした育児をする環境をファミリーセンタードケアといいますが、本来は一番望ましい形なので、できることを少しでもしようと心がけています。

新型コロナウイルス感染症は妊娠にもブレ

NICUの後方支援 GCU

GCUは、NICUで状態が安定してきた新生児が引き続き治療を受ける新生児強化治療室で、NICUの後方担当といえます。

妊婦と胎児を診るMFIUCUと合わせ、これらの3室があることが、総合周産期母子医療センターとしての必須要件です。



キをかけており、世界的に出産数が減っています。現在の状況への不安と、将来の見通しが立たないことなどが理由とされ、このところの日本の出生数は1〜2割ほど減少するといわれています。

また近年、母体の高齢化が進んでいます。1985年の平均初産年齢は26・7歳でしたが、2011年に30・1歳となって以降は30代の初産が定着しています。

初産が高齢だと、なかなか第2子、第3子と繋がりにくく、また高齢化により女性も病気になるてくるので、合併症も増えてきます。総合病院ですので、さまざまな合併症を持ちながら妊娠出産育児をされていく方が多く、丁寧に寄り添いながらのケアを大切にしています」

—— 帝京大学医学部附属病院の総合周産期母子医療センターならではの強みを教えてください。

「当院には小児外科の専門医が3人いるのが大きな強みです。脳神経外科の医師も新しく来られたので、子供の脳外科疾患の取扱も可能になってきました。

また精神科の体制が充実しているのも当院の特徴なので、精神科領域の疾患のある妊産婦さ

んも多いです。赤ちゃんは元気でも、お母さんが子育てできない状態というケースもありますので、ソーシャルワーカーとともに丁寧に対応しています。

出産を取り巻く環境は、新型コロナウイルス感染症や社会の変化につれ変わってきます。若年や高齢の方、シングルの方など、妊産婦さんの状況も多様になっています。私たちは、地域の中核病院として、安心して出産できる体制を整えています」



NICU お母さんと赤ちゃんを見守る、助産師と看護師

妊産婦や赤ちゃんの一番近くにおいて、重要な役割を担うのが助産師と看護師です。助産師の近内智美さんと看護師の猪越遥佳さんに話を伺いました。

猪越「NICUの対象になっているのは、基本的に36週未満の早産で生まれた赤ちゃん、体重が2300グラム以下の赤ちゃんです。それ以外には黄疸、低血糖、呼吸障害、先天性疾患がある赤ちゃんが入院しています。」

また、赤ちゃんは元気で、安心して帰れるおうちが整っていないケースもあるので、保健師が介入し、おうちの環境が整うまで一時的に入院するということがあります」

——NICUにはどのようなスタッフが関わっているのでしょうか。

近内「医師、助産師、看護師が揃うのが一般的ですが、当院では専属の薬剤師もおります。赤ちゃんはNICUから移動ができないので、X線などを扱う診療放射線技師、また小さく生まれることで足が変形することがあり、のちの歩行障害に繋がらないよう早めに理学療法士が介入し

ます。

その他、呼吸器や点滴などの機材の管理をする臨床工学技士、管理栄養士など、幅広い職種スタッフが関わっています。

ハイリスクな母子を管理しているので、妊娠中に外来で検査に来ている時から、産科とNICU、薬剤師、ソーシャルワーカーと情報共有をしています。

出産後は、産科にお母さん、NICUに赤ちゃん、別々の場所にいる状態ですが、1日に2回はお母さんと赤ちゃんの状態を共有し、治療に臨みます」

——最も気を使うところを教えてください。

猪越「新型コロナウイルス感染症に限らず、感染症は赤ちゃんにとって大きな影響を及ぼします。私たちが通常持っているような菌でも、血液に入ると重症化し後遺症を残すことがあるので、全員で気をつけています」

近内「赤ちゃんとの対面は、ご両親にとっても赤ちゃんにとっても重要なことです。ですが今は新型コロナウイルス感染症の影響で、お母さ



近内智美さん 助産師

2007年3月 北海道医療大学卒業
2008年3月 帝京平成看護短期大学専攻科助産学科卒業
2011年4月 帝京大学医学部附属病院 産科MFICU
2012年4月 帝京大学医学部附属病NICU

助産師

NICUの助産師は、主に産後に、母乳相談、搾乳機の使い方への指導、小さく生まれた赤ちゃんが初めておっぱいを吸う時のサポートなどを行っています。

産後すぐは、お母さんは赤ちゃんに離れて過ごさないとはいけません。まずは可愛いと思ってもらうことが第一なので、触れたり、お世話をしたりといった接触の機会を通して、お父さんお母さんが赤ちゃんに対して愛着を持ってもらうよう心がけていきます。



んが先に退院した後は、父母どちらかが1日1時間しかいられない決まりになっています。時間が限られているので、今日はお風呂に入れるとか、おっぱいを吸ってもらおうとか、お母さんがしたいことを事前に聞いておき、時間の調整などをしています。

また、なるべく退院後の負担が少なくなるよう、不安に感じていることを中心にピックアップしてケアすることも心がけています」

猪越「お父さんとお母さんが一緒に赤ちゃんを過ごすことは、家族の形をつくる上でとても大事なことです。ご夫婦で幸せな気持ちを共有してほしいのですが、新型コロナウイルス感染症の影響で、ご両親どちらかと私たちスタッフが赤ちゃんとお会いする形になっています」

近内「私たちはあくまでお世話をする係で、この先も一緒にいられる訳ではありません。ご両親は家族としてずっと一緒にいる存在なので、赤ちゃんが生まれた時の喜びを共有することは、この先の赤ちゃんにとっても家族にとっても大切なことだと思います」

——このお仕事をされていてよかったと思ったことを教えてください。

猪越「妊娠中から状態が良くなく、出生後72時

間が生きられるかどうか決まる境目だと言われる赤ちゃんもいます。あるお母さんは、すぐには受け入れることができずに塞ぎ込んでしまっていました。ですが赤ちゃんが少しずつ元気になって、抱っこしたり体を拭いたりしている間にお母さんの気持ちも安定しました。

無事に退院し、お母さんが外来に大きくなった赤ちゃんを連れて来て『ありがとう』と言われた時は、この仕事をやってよかったと思えました」

——今出産を控えている方や、お子さんを持ちたいと考えている方にメッセージをお願いします。

猪越「妊娠出産は、お母さんはもちろん、お父さんやその他のご家族もたくさん不安とか心配を抱えて臨むことですが、さらに新型コロナウイルス感染症が加わっています。そんな思いをしているお母さんと赤ちゃんが元気におうちに帰れるよう、これから精一杯努めていきたいと思っています」

近内「妊娠出産は、思いがけず何らかの異常が起こることも多いです。少しでも不安を軽減しながら赤ちゃんを育てていけるようなお手伝いができたらいいなと思っています」

看護師



猪越遥佳さん 看護師

| 2011年度 帝京高等看護学院卒業

NICUの看護師は、赤ちゃんが安全に成長できるように、医師の指示のもと24時間体制で看ています。

ちょっとしたミスが赤ちゃんの治療に大きな影響を与えてしまうので、忙しい現場でも、医師とのコミュニケーションエラーがないよう努めています。

何らかのリスクを抱えて生まれてきた赤ちゃんが、元気にお家に帰れること。それが私たち看護師の一番の思いです。



分娩室、LDR、新生児室 私たち助産師がご案内します

安全な出産のためには、基本となる「分娩室」「LDR」「新生児室」の快適さも重要なファクターです。

総合周産期母子医療センターの助産師の原口愛美さんと中條麻実さんにお話をうかがいました。

——普段のお仕事について教えてください。

原口「私は助産師として、授乳や乳房マッサージの方法、赤ちゃんのお風呂の入れ方を指導しています。

早く仕事を再開したい方も多いですが、産後の体は思った以上にダメージを受けているので、いつから動いていいのかなどを指導しています」

中條「退院してからのご家族の支援体制がどういふ状況なのかも確認します。お父さんやご家族がどれくらい育児に関われるのかをお聞きし、サポートが必要なことがあれば、ソーシャルワーカーに繋いでいます。

また、ちょっとしたことで涙が出たり、何もやる気が起きなかつたりすることがありますが、

これを総称して『マタニティブルーズ』と呼びます。不安な気持ちをなかなか表に出せない方もいらつしやるので、SOSのサインを見逃さないようにしています」

原口「経過が順調だった方でも、ホルモンバランスの崩れによりマタニティブルーズになる可能性があります。多くは問題なく改善しますが、産後うつにつながることもあるので気をつけて見えています」

——今出産を控えている方や、お子さんを持ちたいと考えている方にメッセージをお願いします。

原口「妊娠出産育児は、お母さん一人だけでおこなうものではありません。私たちスタッフがお手伝いしますので、お気軽に相談してください」

中條「お母さんと赤ちゃんを継続的にフォローするために、外来の助産師と病棟の助産師、産科の医師とNICU医師・看護師、メディカルソーシャルワーカーがチームを組んでいます。不安を少しでも和らげて、穏やかに妊娠生活が送れるように支援いたします」



原口愛美さん 助産師

2012年3月 帝京大学医療技術学部看護学科卒業
2012年4月 帝京大学医学部附属病院入職
MFICU配属
アドバンス助産師



中條麻実さん 助産師

2012年3月 母子保健研修センター助産師学校卒業
2012年4月 帝京大学医学部附属病院入職
MFICU配属
アドバンス助産師

分娩室

ハイリスクの妊婦に対応している分娩室です。通常の分娩室より広く、ベッドの周りに必要な機械が揃っています。



原口「主にハイリスクの方の分娩をおこなうので、母体や赤ちゃんに何かあった時に十人くらいのスタッフが入れられるような広さになっています。」

他の病院から母体を受け入れることもあります」

中條「広さは、ハイリスクの患者さんに必要な医療機器を十分に設置するためでもあります。」

（緊急の際は）手術室やNICUも近いので、すぐ手術室に向かうことができます。また、NICUの医師もすぐに来ることがができます」

LDR

LDRとは、陣痛、分娩、回復を意味する英単語の頭文字を取ったもので、陣痛から産後までを同じ部屋で過ごすシステムです。



中條「一見普通の病室のように見えますが、ベッドが分娩台に変化するようになっており、分娩に必要な機器も置いてあります。ハイリスクの方でなく、通常の出産に対応しているお部屋です」

原口「例えば陣痛が起こる前に破水した方でも、お母さんと赤ちゃんの状態が問題なければリスクは高くないので、このお部屋で過ごしていただきます。」

陣痛室から分娩室へ移動する必要もないので、リラックスしてお産に臨めると思っています。当院ならではの、快適性と安全性を両立したお部屋です」

新生児室

正常な新生児が退院まで過ごす部屋です。スタッフが24時間常駐しており、新生児のお世話をしています。



※人形を乗せ撮影しています

原口「当院は『母子異室制』であり、赤ちゃんとお母さんが別々の部屋で過ごし、授乳の時にお母さんが新生児室にきて母乳やミルクをあげています。」

お母さんが赤ちゃんに授乳する姿を見て、その方にあった授乳のやり方をアドバイスしたり、育児相談などをその場で受けています」

中條「新生児室にいる赤ちゃんは、1〜2人の時もあれば、多い時には15人くらいいることもあります。帝王切開で7日間、通常分娩で初産の方は5日間など、基本的にいられる期間は決まっています」



出生前診断

出生前診断とは、広い意味では生まれる前の赤ちゃん（胎児）について診断することですが、実際的には胎児の形態異常、染色体異常を調べる検査を行い、その結果をもとに、妊婦さんやパートナーに判断する情報を提供することです。

「出生前診断の検査には段階があり、最初の検査（非確定的検査）において、高い確率で染色体疾患が疑われる結果が出た方に、確定検査をおこないます。非確定的検査である『NIPT』と『クアトロ検査』は、お母さんから採血した血液から胎児の染色体異常を調べるといってもいいです。この検査では偽陽性が出るケースもありますので、確定検査をおこないます。

確定検査である『羊水検査』は、お腹に針をさして羊水を採取して染色体異常や遺伝子疾患の有無を



木戸浩一郎先生
産婦人科准教授

1986年 東京大学医学部卒業

調べるもので、侵襲的検査となり流産や出血死産などの可能性がわずかにあります。

クライアントには、国家資格をもった遺伝カウンセラーが対応しており、お母さんお父さんがどんな不安を持っているのかを聞いて寄り添い、かつわかりやすくご説明します。

NIPTやクアトロ検査で陽性となつて確定検査が必要になつた方や、確定検査で陽性だつた方には、ご本人だけでなくカップルでお越しいただくようにしています。思つてもみなかつた結果を突きつけられると、頭が真っ白になつてしまい、後になつて『あの時の判断は間違つていた』となりがねません。『どういう結果であれ、最大限サポートします』と、お伝えするようにしています。



悪性腫瘍の妊孕性温存治療

にんようせい

AYA世代（15歳から30歳代までの若年層）の悪性腫瘍への治療

（抗がん剤や放射線）により、生殖機能に影響が出ることがあります。

「治療前の卵子を採取し未受精の状態です凍結保存したり、生殖細胞を採取・保存したり、または人工授精によって受精させた受精卵を保存しておくことを『妊孕性温存治療』といいます。

妊孕性温存（婦人科で妊娠する力を残す）の主な対象となる悪性腫瘍としては、早期の子宮頸がん、子宮体がん、卵巣がんがあります。子宮頸がんは長径2センチまでの癌であれば、広汎子宮頸部摘出術により、子宮、卵巣を温存することができます。

子宮体がんは、筋肉への浸潤が浅い場合であれば、ホルモン剤の内服治療で手術せずに治療することが

可能で、子宮、卵巣を残せます。

卵巣がんは、がんが片側卵巣のみで、かつ組織が高分化型であることが原則となります。子宮と反対側の卵巣を残す縮小手術をおこなうこと

で、術後に妊娠することが可能です。いずれの治療法も、患者さんが妊娠可能な年齢であること、患者さんがご本人が強い妊娠への希望を持っていること、再発の可能性についてもご理解されており、長期的な外来診療にもしっかりと同意を頂いていることが条件です。

治療を受けられた後も、高度生殖補助医療への対応や、さまざまな周産期合併症に対応する総合周産期母子医療センターでの管理が可能で、妊娠後も安心していただける診療体制となっています。

長阪一憲先生 産婦人科科長、主任教授

2000年愛媛大学医学部医学科卒業。2008年東京大学大学院医学系研究科卒業 医学博士取得。東京大学医学部附属病院女性診療科産科などでの勤務を経て、2017年より帝京大学医学部附属病院産婦人科にて勤務。

妊婦さんや授乳中にも安心な投薬指導を

金子美佳さんは、産科病棟のM F I C Uに所属している病棟薬剤師です。

「薬剤師と聞いて皆さんがイメージされるのは、薬局にいたり調剤をしている薬剤師さんだと思います。」

私は産科病棟で、入院患者さんの持参薬を確認したり、投薬状況の確認をしています。新しい薬剤が開始された際には、説明書を作って服薬指導をしています」

——お仕事をされる上で、最も気をつけていることを教えてください。

「大学病院の産科病棟ですので、高血圧や喘息、糖尿病などさまざまな既往歴や合併症をお持ちの方や、精神疾患などの薬を飲んでいらっしゃる方もいます。妊娠中や授乳中でも飲める薬なのかということの確認に一番気を使います。」

糖尿病に対してインスリン注射を始めることになった方は、赤ちゃんへの影響を心配されて、不安になる方もいます。その際は、インスリンの使用方法だけでなく、薬の必要性を説明するこ

とで、薬の投与に対する不安が少なくなって頂けるよう心がけています」

——薬剤部の自慢できるところを教えてください。

「感染症に詳しい薬剤師、糖尿病に詳しい薬剤師など、さまざまな専門に特化した薬剤師が揃っています。何か疑問に思うことがあっても、頼りになる先輩に聞けば快く教えてくれますので、的確に対応することができると思います」

——これまでで印象に残っている出来事はありますか。

「持病のお薬を、妊娠や授乳を機に中止される方、妊娠や授乳中でも比較的安心して飲めるものに変更される方もいらっしゃいます。」

ある時、偏頭痛をお持ちの授乳婦さんに、ある偏頭痛薬を飲みたいという相談をされたことがあります。ほとんどの薬は添付文書に授乳中には避けるようにとありますが、母乳への影響は比較的少ないという情報提供をしました。授乳中に薬を飲むことへの不安が軽くなったと安心された姿が印象に残っていますし、やりがい

にも繋がります」

——今後の目標を教えてください。

「妊婦や胎児に配慮した薬物療法を安全におこなうことができる薬剤師を認定する『妊婦・授乳薬物療法認定薬剤師』という資格があるので、今はその取得を目指しています。」

今後はもっと知識をつけて、先生や看護師さんから頼られるようになりたいですし、患者さんからも『病棟の薬剤師に相談しよう』と思ってもらえる存在になりたいです」



金子美佳さん 薬剤師

2017年3月 東邦大学薬学部 卒業
2017年4月 帝京大学医学部附属病院 入職

MY FAVORITE



学生の頃からテニスをしています。今は薬剤部の先輩たちと、月に1〜2回プレーしています。

治療の基本は患者さん一人ひとりに合った 美味しい食事です

管理栄養士の芦川美希さんは、栄養部で給食の管理や栄養指導をおこなっています。

「栄養部の業務は大きく2つに分かれます。1つめが入院患者さんの食事を提供する『給食管理業務』で2つ目が外来と入院患者さんへの栄養指導、病棟での栄養管理を行う『栄養管理業務』です。

『給食管理業務』では給食業務を委託している会社のスタッフと協力し、治療の一環として、患者さん一人ひとりの症状に合わせた食事を提供し、一日でも早い回復に貢献できるように努めています」

——お仕事をされる上で、最も気をつけていることを教えてください。

「入院患者さんのお食事なので、衛生管理には特に気を付けています。

また治療の役割を果たすためには、完食していただくことが大事です。そのために美味しく見た目でも食欲をそそるお食事を提供しなければなりません。患者さんの声を取り入れるために年4回お食事のアンケートを取り、その結

果を献立作成に反映するようにしています。朝食と昼食は対象となる患者さんへ2種類のメニューからお選びいただける選択食を毎日実施しています。選択したメニューを記入する用紙にありがとうなどのメッセージを書いていただくことが多く、部内のみんで共有して楽しく読んでいます。

他にも入院中に少しでも季節感を楽しんでいただけるよう、四季折々の行事に合わせた行事食の提供や治療による影響で食欲がない患者さんへの個別対応など、たくさんのお客様に喜んでいただけるような工夫をしています」

——院内での協力体制を教えてください。

「院内では緩和ケアチーム、摂食嚥下チーム、透析予防チームなどさまざまなチームに参加しています。中でも医師、看護師、薬剤師、管理栄養士、臨床検査技師、理学療法士、歯科医師により構成された栄養サポートチームでは、多職種が協力してきめ細かい栄養管理を行っています。

また、チーム以外でも栄養管理はすべての治療の基礎になるので、必要な患者さんに栄養士



芦川美希さん 栄養部課長

1995年 管理栄養士免許取得
資格
日本糖尿病療養指導士
NST専門療法士
臨床栄養代謝専門療法士(腎疾患)

が介入します」
——今後の目標を教えてください。

「栄養部の基本理念は『栄養は生きる力の源であり、あらゆる治療法の基礎である』です。今後も患者さんの立場に立った心の通う栄養管理を続けていくことが1番の目標です」

MY FAVORITE



大学生の2人の息子がいます。長男は離れて暮らしているのですが、年に1〜2回帰省した時に一緒に過ごせる時間を楽しみにしています。

医療についての知識を深める動画サイト
「帝京メディカル」

帝京大学医学部附属病院では、当院の医師が専門分野の疾患や治療方法について、詳しく解説する動画サイト「帝京メディカル」を制作しています。

「帝京メディカル」は、病気の症状や予防法、最新の検査や治療方法についてポイントを絞り、簡潔に7分～8分にまとめています。

「帝京メディカル」の各コンテンツは

帝京大学医学部附属病院のホームページ
「05病院のご案内」↓「帝京メディカル」

より閲覧できます。ぜひご覧ください。

<p>■ 子宮の病気 ～女性にやさしい低侵襲手術～ 産婦人科 主任教授 長阪 一憲</p>
<p>■ 進化するロボット手術～最新鋭 Mako システムの導入～ 整形外科 教授 中川 匠 整形外科 病院准教授 松田 健太</p>
<p>■ 新しい臓腑手術～最新技術で高難度手術に挑む～ 外科 教授 三澤 健之</p>
<p>■ がんゲノム医療～ひとりひとりに最適ながん治療を～ 腫瘍内科 病院教授 渡邊 清高</p>
<p>■ 骨折予防～ロコモティブシンドロームとは～ リハビリテーション科 教授 緒方 直史</p>
<p>■ 肺がん～化学療法の新たな展望～ 腫瘍内科 教授 関 順彦</p>
<p>■ 僧帽弁閉鎖不全症～マイトラクリップと心臓リハビリ～ 循環器内科 准教授 渡邊 雄介 循環器内科 講師 紺野 久美子</p>
<p>■ ESD ～高度な技術でがんを切り取る～ 内科 准教授 小田島 慎也</p>

お薬相談室（薬剤師外来）を設置しました

2021年9月28日より、薬剤師外来を

2階外来エリアのエスカレーター横に設置しました。

主治医と連携し、薬剤師が説明等を行います。

対象になる方

主に飲み薬による

抗がん剤治療を受けている外来の患者さん

主な内容

- ・ 薬剤の服用方法、副作用の種類や副作用発現時の対処方法について説明
- ・ 薬の飲み合わせについて確認
- ・ 薬の服用状況や残薬について確認
- ・ 副作用の発現状況について確認

ご希望の方がいらっしゃいましたら、主治医へご相談ください。



P.2 クロスワードの答え

プ	リ	セ	ス
ロ	ボ	ミ	ニ
ロ	ン	ド	ー
ー	セ	ナ	カ
グ	レ	イ	ビ

ニ_A ソ_B プ_C

—— 理念 ——

患者そして家族と共にあゆむ医療

—— 基本方針 ——

安心安全な高度の医療
患者中心の医療
地域への貢献
医療人の育成
医学研究の推進



帝京大学医学部附属病院

〒173-8606 東京都板橋区加賀2-11-1

TEL.03-3964-1211 (代表)

<https://www.teikyo-hospital.jp/>

院内誌についてのお問い合わせ先

帝京大学医学部附属病院 広報委員会

E-mail:kohoiin@med.teikyo-u.ac.jp